

芥川龍之介

杜子春



杜
子
春

一

或春の日暮です。

唐の都洛陽らくようの西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春とって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費いつか尽して、その日の暮しにも困る位、憐あわれな身分になっているのです。

何しろその頃洛陽といえは、天下に並ぶもののない、繁昌を極めた都ですから、往来にはまだしつきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当たっている、油のよくな夕日の光の中に、老人のかぶった紗しやの帽子や、土耳古トルコの女の金の耳環や、白馬に飾った色系の手綱たづなが、絶えず流れて行く容子ようすは、まるで画のような美しさです。しかし杜子春は相変わらず、門の壁に身を凭もたせて、ぼんやり空ばかり眺めていました。空には、もう細い月が、うらうらと靡なびいた霞の中に、まるで爪の痕あとかと思う程、かすかに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまった方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇すがめの老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考えているのだ。」と、横柄おうへいに声をかけました。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものでかと思っていますのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしました。

「そうか。それは可哀あはれそうだな。」

老人は暫しばらく何事か考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、

「ではおれがよいことを一つ教えてやろう。今この夕日

の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから。」

「ほんとうですか。」

杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。ところが更に不思議なことには、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりもなお猶白くなつて、休みない往来の人通りの上には、もう気の早いこうもり蝙蝠が二三匹ひらひら舞っていました。

二

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘って見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮らしを始めました。蘭陵らんりょうの酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉りゆうがんにくをとりよせる

やら、日に四度色の変る牡丹ぼたんを庭に植えさせるやら、白しろ
 孔雀くじやくを何羽も放し飼いにするやら、玉を集めるやら、錦
 を縫こわせるやら、香木こうぼくの車を造らせるやら、象牙の椅子
 を誂あつらえるやら、その贅沢を一々書いていては、いつに
 なってもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂を聞いて、今までは路で行き合っ
 ても、挨拶さえしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやっ
 て来ました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経
 つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中
 で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になつて

しまったのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には尽されません。極ごくかいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲んで、天竺生てんじくれの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠ひすいの蓮の花を、十人は瑪瑙めのうの牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏しているという景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、

だんだん貧乏になり出しました。そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになつて見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなつてしまいました。いや、宿を貸すどころか、今では椀に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立

っていました。するとやはり昔のように、片目すがめ眇の老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考えているのだ。」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いた儘、暫しばひくは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです。」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから。」

老人はこう言ったと思うと、今度も亦人またごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、たちま忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白

孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使
——すべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいにあった、あのおびただ夥しい黄金も、
又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなってしまう
した。

三

「お前は何を考えているのだ。」

片目眇の老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを

問いかけました。勿論彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破っている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇たたずんでいたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思っっているのです。」

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好いことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの——」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げ

て、その言葉を遮ちかえりました。

「いや、お金はもういらなないので。」

「金はもういらない？ ははあ、では贅沢ぜいたくをするにはとうとう飽きてしまったと見えるな。」

老人は審いぶかしそうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢ぜいたくに飽きたのじゃありません。人間というものに愛想がつきたのです。」

杜子春は不平そうな顔をしながら、突慳貪つっけんどんにこう言いました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従ついでしようもしますけれど、一旦貧乏になって御覧なさい。柔やさしい顔さえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持になったところが、何にもならないような気がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出しました。

「そうか。いや、お前は若い者に似合わず、感心に物の

わかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか。」

杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切った眼を挙げると、訴えるように老人の顔を見ながら、「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になって、仙術の修業をしたいと思うのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でしょう。仙人でなければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になって、不思議な仙術を教えてください。」

老人は眉をひそめた儘、暫くは黙って、何事か考えているようでしたが、やがて又につこり笑いながら、

「いかにもおれは峨眉がびさん山に棲すんでいる、鉄冠てつかんし子という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう。」と、快く願を容いれてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠子に御時おじき宜ぎをしました。

「いや、そう御礼などは言つて貰うまい。いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな。——が、兎も角もまずおれと一しよに、峨眉山の奥へ来て見るが好い。お、さいわい幸、ここに竹杖が一本落ちてゐる。では早速これへ乗つて、一飛びに空を渡るとしよう。」

鉄冠子じゆもんはそこにあつた青竹を一本拾い上げると、口の中に呪文じゆもんを唱えながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るようにまたが跨またがりました。すると不思議ではありませんか。竹杖はたちま忽ち竜のように、勢よく大空へ舞い

上って、晴れ渡った春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は胆きもをつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、（とうに霞まぎに紛れたのでしよう。）どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢びんの毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱い出しました。

朝に北海に遊び、暮には蒼梧そうご。

袖裏しゆうりの青蛇せいだ、胆気粗たんきそなり。

三たび嶽陽がくように入れども、人識しらず。

朗吟して、飛過ひかす洞庭湖。

四

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞い下りま
した。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、
よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、

茶碗程の大きさに光っていました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やっと耳にはいるものは、後の絶壁に生えている、曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西王母せいおうぼに御眼にかかつて来るから、お前はその間ここに坐つて、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろなましよろ魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、

たといどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利きいたら、お前は到底仙人にはなれないものだど覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙っているのだぞ。」と言いました。

「大丈夫です。決して声なぞは出しません。命がなくなっても、黙っています。」

「そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから。」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨またがつて、夜目にも削ったような山々の空へ、一文字に消えて

しまいました。

杜子春はたった一人、岩の上に坐った儘、静に星を眺めていました。すると彼かれこれ是半時ばかり経って、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透とおり出した頃、突然空中に声があった、

「そこにいるのは何者だ。」と、叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしませんでした。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないと立ち所に、命はないものと覚悟しろ。」と、いかめしく嚇おどしつけるのです。

杜子春は勿論黙っていました。

と、どこから登って来たか、爛らんらん々と眼を光らせた虎が一匹、忽然こっぜんと岩の上に躍り上って、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮たけりました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思うと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇はくだが一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っています。

した。

虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互に隙でも窺うかがうのか、暫くは睨合いの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬またたく内に、なくなってしまうと思った時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失うせて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待っていました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のような黒雲が一面にあたりをとざすや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄じく雷らいが鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑たきのような雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐っていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、——暫くはさすがの峨眉山も、覆くつがえるかと思う位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟とどろいたと思うと、空に渦巻いた黒雲の中から、まっ赤な一本の火柱が、杜子春

の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡って、向うに聳そびえた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯いたずらに違いありません。杜子春は漸ようやく安心して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐つ

ている前へ、金の鎧よろいを着下きくだした、身の丈三丈もあろうという、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉みつまたの戟ほこを持っていましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を嗔いからせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉かいびやく山という山は、天地開闢かいびやくの昔から、おれが住居すまいをしている所だぞ。それも憚はばからずたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ。」と云うのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、默然もくねんと口を噤つぐんでいました。

「返事をしないか。——しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属けんぞくたちが、その方をずたずたに斬ほこってしまふぞ。」

神将は戟ほこを高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満みちみちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。

この景色を見た杜子春は、思わずあつと叫びそうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思い出して、一生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れないのを見ると、怒ったの怒らないのではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとってやるぞ。」

神将はこう喚くわめが早いか、三叉みつまたの戟ほこを閃ひらめかせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡

る夜風の音と一しよに、夢のように消え失せた後だったのです。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変わらず、こうこうと枝を鳴らせています。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けあおむにそこへ倒れていました。

五

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れていましたが、

杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、閻あんけつどう穴道という道があつて、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい風がびゅうびゅう吹き荒すさんでいるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯ただ木の葉のように、空を漂って行きましたが、やがて森羅しんらでん殿という額の懸った立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまわりを取り捲いて、階きざのほしの前へ引き据えま

した。階の上には一人の王様が、まっ黒な袍きものに金の冠かんむりをかぶって、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて噂うわさに聞いた、閻魔大王えんまに違いありません。杜子春はどうなることかと思いつながら、恐る恐るそこへ跪ひざまずいていました。

「こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐っていた？」
閻魔大王の声は雷のように、階の上から響きました。

杜子春は早速その問に答えようと思いました。ふと又思い出したのは、「決して口を利きくな。」という鉄冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れた儘、啞のように

黙っていました。すると閻魔大王は、持っていた鉄の笏しやくを挙げて、顔中の鬚ひげを逆立てながら、

「その方はここをどこだと思おう？

速すみやかに返答をすれば

好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責かしゃくに遇あわせてくれるぞ。」と、威丈高いたけだかに罵ののしりました。

が、杜子春は相変らず唇くちびる一つ動かしません。それを

見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度に畏かしこまって、忽ち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、劍つるぎの山や血の池の

外にも、焦熱地獄しやうねつという焰の谷や極寒地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、代る代る杜子春を抛ほうりこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵きねに撞つかれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸われるやら、熊鷹に眼を食われるやら、——その苦しみを数え立てては、到底際限がない位、あらゆる責苦せめくに遇わされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じつと歯を食いしばった儘、一言も口を利きませ

んでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返ってしまったのでしよう。もう一度夜のような空を飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り杜子春を階きざはしの下に引き据えながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言う気色けしきがございません。」と、口を揃えて言上ごんじょうしました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、

「この男の父母ちちははは、畜生道に落ちている筈だから、早速

ここへ引き立てて来い。」と、一匹の鬼に言いつけました。

鬼は忽ち風に乗って、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二匹の獣を駆り立てながら、さっと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえばそれは二匹とも、形は見すぼらしい痩せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐っていた

か、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせてやるぞ。」

杜子春はこう嚇おどされても、やはり返答をしずくにいました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好いと思っっているのだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚きました。「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ。」

鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄の鞭むちをとつ

て立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未釈なく打ちのめしました。鞭はりゆうりゆうと風を切って、所嫌わず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、——畜生になった父母は、苦しそうに身を悶もたえて、眼には血の涙を浮べた儘、見てもいられない程嘶いななき立てました。

「どうだ。まだその方は白状しないか。」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階きざしの前へ、

倒れ伏していたのです。

杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、かた緊く眼をつぶっていました。するとその時彼の耳には、ほとんど殆声とはいえない位、かすかな声が伝わって来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何とおつしや仰つても、言いたくないことは黙って御出おいで。」

それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子

春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しそうに彼の顔へ、じつと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色けしきさえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしよう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶまろようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びま

した。……

六

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでいるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。「どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい。」

片目眇すがめの老人は微笑を含みながら言いました。

「なれませんが、なれませんが、しかし私はなれなかったことも、反かえって嬉しい気がするのです。」

杜子春はまだ眼に涙を浮べた儘、思わず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません。」

「もしお前が黙っていたら——」と鉄冠子は急におごそか厳な顔になって、じつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思っていたのだ。——お前はもう仙人になりたいたいという望も持っていない。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思うな。」

「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです。」

杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩こもつていました。

「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度と

お前には遇わないから。」

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、

「おお、さいわい幸、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓ふもとに一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう。」と、さも愉快そうにつけ加えました。

日本文学電子図書館

杜子春

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館